

ならずもの

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

オンドリがメンドリにいいました。

「もうクルミがうれる時期じきになったよ。どうだい、いつしよに山へ行って、思いきり食べてこようじゃないか。まごまごしていると、リスのやつにみんなもっていかれちゃうからね。」

「けっこうね。」

と、メンドリがこたえました。

「いきましようよ。ふたりでたのしんできましようね。」

そこで、ふたりはいつしよに山へでかけました。とてもいいお天気でしたので、ふたりは夕がたまで山にいました。

ところがですよ、ふたりがあんまり腹はらいっぱい食べすぎたせいとか、それとも、高慢こうまんちきになつてしまったためか、そのへんのところはよくわかりませんが、とにかく、ふたりとも歩いてかえるのがいやになつてしまったのです。

そこで、オンドリがクルミのからで小さな車をこしらえることになりました。車ができあがりすると、メンドリはそのなかにすわりこんで、オンドリにむかっていいました。

「おまえさん、車のまえにいつて、馬がわりにひつぱったらどうなのよ。」

「ふん、ありがたいこった。」

と、オンドリがいました。

「馬のかわりをするくらいなら、歩いてかえるほうがよっぽどいいや。いやなこった、それじゃ、まるで話がちがうもの。御者ぎよしやになつて、御者台にすわるんならべつただけど、じぶんでひつぱるなんてのはごめんだぜ。」

こんなふうには、ふたりがいいあらそつてるところへ、カモがガアガアなきながらやつてきました。

「やい、どろぼうども。だれがきさまたちに、おれさまのクルミ山へはいれつていったんだ。待つてろ。いまひどいめにあわしてやるからな。」

こういうがはやいか、カモはくちばしを大きくあけて、オンドリにつつかかつていきました。けれども、オンドリもまけてはいません。すばやく、カモのからだの上にぐんどのしかかつて、そのあげく、けづめでカモをむちやくちやにひつかいたものですから、とうとうカモもこうさんしてしまいました。ですから、その罰ばつとして、カモは車のまえにつながれて、車をひつぱることを承しょうち知させられました。

そこで、オンドリは御者台ぎよしゃだいにすわって、御者になりすましました。さてそれから、オンドリはものすごいいきおいで、車をすつとばしていきました。

「カモ公こう、カいつばい走るんだぞ。」

こうして、しばらく走っていきますと、歩いているふたりのものであいました。それはとめ針はりとぬい針はりでした。ふたりは、

「待まつてくれえ、待まつてくれえ。」

と、どなりました。そして、

「もうすぐくらくなるだろう。そうすると、ぼくたちにはひと足も歩けないし、それに道もとつてもきたないんだ。ほんのすみっこでけっこうだから、車にのせてはもらえないかい。じつは、ふたりとも町の門のまえの仕立屋したてやの宿やどにいたんだけど、ビールをのんでいて、おそくなつちまつたんだよ。」

と、いいました。

このやせこけたひとたちなら、たいして場所ばしよもとりません。で、オンドリはふたりをのせてやりました。もつとも、そのまえに、ふたりとも、オンドリとメンドリの足をふまなという約束やくそくをさせられましたかね。

夜おそくなつて、みんなは、とある宿屋やじやにつきました。今夜はもうこれいじょうさきへいく気はありませんし、それに、カモの足つきもあぶなくなつて、あつちへよろよろ、こつちへよろよろするありさまでしたから、みんなはここにとまることにしました。

宿屋やじやの主人しゆじんは、さいしよのうちは、

「てまえどもは、もういっぱいです。」

などといつて、ことわろうとしました。それに、このれんちゆうが、たいしたお客きやくではなさそうにも思われたのです。けれども、そのうちにみんなが、

「くるとちゆうで、メンドリさんがたまごをうんだんだけど、そのたまごをあげますよ。」

「このカモは、まい日ひとつつたまごをうむんですが、このカモもさしあげましょう。」

などと、さかんにうまいことをならべたてたものですから、とうとうしまいには、主人も、

「それじゃ、今夜はおとまりなさい。」

と、いいました。

そこで、みんなはどんどんごちそうをはこばせて、大きわぎをしました。

あくる朝はやく、夜よのあけがた、まだみんながぐっすりねむっているうちに、オンドリはメンドリをおこしました。そして、まずたまごをとりだして、からをつついて穴あなをあげ、

その中身なかみをふたりですつかりのんでしまいました。それから、からはかまどの上にはうりあげておきました。

つぎに、ふたりは、まだねむっているぬい針はりのところへいって、その頭をつまんで、主人ゆじんのいすのクツションにつきさしました。それから、とめ針はりのほうは、主人の手ぬぐいにさしておきました。こうしておいて、あとはどうにでもなれとばかり、ふたりは野原をとぶようにしてにげていってしまいました。

カモは野天のてんでねるほうがすきだったものですから、庭にわでねむっていたのですが、ニワトリたちがバタバタにげていく音に目をさしました。そして、すぐに小川を見つけて、川下へおよいでいきました。そのほうが、車なんかをひっぱるよりもずつとはやくいけました。

それから二、三時間たったとき、宿屋やどやの主人しゅじんはようやく羽根はねぶとんからおきだして、顔をあらいました。さて、手ぬぐいで顔をふこうとしますと、とめ針はりがすうつと顔をこすって、おかげで右の耳から左の耳まで、赤いミミズばれができてしまいました。それから、こんどは、台所だいどころへいって、タバコのパイプに火をつけようと思いましたが、それがかまどのそばまできかすと、たまごのからがパチンとはねて、目のなかにとびこみました。

「けさは、いやに顔にたたるな。」

主人はこういって、むしゃくしゃして大きな安楽いすにこしをおろしました。ところがこしをおろしたとたん、いきなりとびあがつて、

「うう、いたい。」

と、さげびました。

こんどは、ぬい針はりが、さつきよりもつとひどく、おまけに頭でないところを、つきさしたのです。

主人はかんかんにおこって、ゆうべあんなにおそくきたお客たちがあやしいぞ、と思いました。そこで、すぐさま立っていって、さがしてみました。ところが、そのお客たちは、みんなもうでかけてしまったあとだったのです。

そこで、主人しゅじんは、ああいうならずものは、もうこれからは、けっしてとめてはやらないぞ、と、かたく心に思ったのでした。なにしろ、あいつらときたら、さんざん飲のみ食くいたあげく、一文いちもんもはらわず、おまけにそのお礼れいとして、とんでもないいたずらをやらかすんですからね。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集（1）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

入力：sogo

校正：チエコ

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ならずもの グリム Grimm

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>